

東北アジア学術交流懇話会ニューズレター

うしとら

第 69 号

● Contents ●

論点：改めて国際交流について考える	辻森 樹	1
Topic: Short Note on My International Academic Exchange Experience	(TSUJIMORI Tatsuki)	1
東北アジア通信：越境大気汚染に関する研究交流と国際政治	明日香壽川	3
Northeast Asian Reports:		
Research Collaboration and International Politics on Trans-boundary Air Pollution	(ASUKA Jusen)	3
会員の広場：食の共生社会：イルクーツクを訪ねて	井上岳彦	4
Members' Forum: Diversities Taste Greater in Siberia	(INOUE Takehiko)	4



改めて国際交流について考える

東北大学 東北アジア研究センター教授
(地球化学研究分野)
辻森 樹



3月後半に、卓越支援「変動地球惑星学」の教育向けの支援経費による国際共同授業のための海外（アメリカ）出張業務を行った。理学研究科の掛川武先生、高度教養教育・学生支援機構の渡邊由美子先生と一緒に、地学専攻の大学院生8名を引率して、ペンシルヴァニア州立大学の講義・研究討論会・野外地質研修会に参加した。また、カーネギー研究所の6つの研究部門のうち、地球物理学ラボと地磁気部門を訪問し、固体地球科学分野で世界を牽引する研究者らの案内で研究施設を見学した。これらの出張業務は将来の国際共同大学院交流を強く意図したもので、国際交流の重要性を改めて再認識する良い機会であったし、美しいキャンパスや機能的な実験室を拝見して改めて身の回りの研究教育環境の早急な再生の必要性を強く意識した。このエッセイでは、本号のテーマ「国際交流」に関して、2, 3の話題を提供したい。その前に、———私は駆け出しの若手研究者の頃、2002年7月から2006年3月まで、カリフォルニア州にある研究型の私立大学にポスドク（博士研究員）として留学した。日常の研究者たちの笑顔とは裏腹に、実績を上げ続けなければ居場所などないという静かな緊張感が常に存在する場での経験は、当時の教授らの個性も手伝って自分を大きく成長させた。しかしながら、アメリカの研究型大学や一流の研究所の研究者を取り巻く状況が理想かという、そうとも言い切れない。留学していた当時は、徹底した成果主義への不安・劣等感や人生設計に関する悩みが尽きなかった。また、「帰りたい国・帰るべき国」である日本への愛情が強かったこともあり、留学後から現在まで日本の大学に籍を置いている。それゆえ私の国際交流の感覚はごく一般的な日本人の感覚の域を超えるものではない。それでも、アメリカの学術コミュニティの2つからフェ

ローの称号を頂くことができ、私の国際的な学術交流の貢献はある程度は認めていただけたようである。したがってこのテーマで執筆したとしても、痛烈に批判されることはないと思いたい。くどいが、アメリカの研究教育機関だけではなく、ロシア、タンザニア、台湾などで個人ベースの学術交流を展開している。このテーマで駄文を草することをお許しいただこう。

1. 国際交流という真剣勝負

現在進行中の情報革命は情報通信の技術の進歩と全地球規模でのインフラ設備の充実を推進し、インターネットを通してはもはや国境の意味は希薄となった。また、国内の和文学術雑誌は著しく衰退し、研究成果の国際学術雑誌（国際誌）への論文掲載が研究者へのミニマム要求事項となっている。鎖国を望む研究者もいるかもしれないが、近年は国境どころか大手2社の研究力分析ツール（Web of Science及びScopus）によって、世界中の研究者の実績が常にガラス張りの状態にある。ところが、世界全体で技術の国際標準・規格の統合化が活発になると、本来利便性を追求するはずの公的な標準化・規格化の設定が国の経済の死活問題に直結するという大きな問題を産み出した。各国の標準化戦略はさまざまな分野に跨っており、基礎科学分野の研究活動にとっても楽観視できない。例えば、地質学に関しては地質図の国際標準化という課題が存在する。学術的に歓迎すべき要素がある一方で、これはGIS（地理情報システム）に関連したソフトウェア開発や情報サービス提供の企業、つまり、それらを有する国家の利益に直結する。固体地球科学分野の機器分析についても、汎用性が高く簡便な試料調整法・測定プロトコルは国際的な整合性が必要

であって標準化の対象になろう。一般に、諸外国との学術交流は、相補的な共同研究を通じた効率的な成果と人材育成が求められる。各国の標準化戦略とは直接関係のない共同研究が多いだろうが、成果発表に必要な国際誌そのものが実は国際規格のようなものである。基準作りに参戦して、それを主導していくためには投稿だけでなく積極的な査読や編集チームへの関与が欠かせない。国際学会についても国際交流を主導するには自ら仕掛けていくしかない。

2. クリエイティブな環境づくり

個人ベースの国際交流が進展して実績を重ねていくと、今度は組織間での連携・協力の可能性を模索し始める。中・長期的な組織間連携は、戦略的な国際共同研究の推進を可能にするだけでなく、国際的に活躍可能な人材を効率よく育成するためにも欠かせない。教員や大学院生の派遣もあれば逆も必然。その場合、受け入れる研究者をクリエイティブな状態にもっていきやすい環境づくりを強く意識する必要がある。例えば、私は居室在室時にはドアを意識的に開いたままにしている。建物全体のセキュリティが保障されるならドアすら不要だと思っている。世界中から優秀な人材が集まるカーネギー研究所の研究者らも居室のドアは開けたままであった(写真1)。

クリエイティブな環境づくりの第一歩として組織構成員のコミュニケーションは必要不可欠であり、それは仕掛けも含めて意識的に努力するしかない。カーネギー研究所の研究設備は決して最先端のものではないが、世界を牽引し、素晴らしい人材を多く輩出している。そのためには、研究に関係した絶妙な「空間」と組織構成員のプロ意識が決定的なのかもしれない。

さて、東北アジア研究センター(CNEAS)ではどうかというと、最近居室ドアの明かり窓が一斉に透明化され、それだけでも雰囲気随分明るくなった。ドアを積極的に開ける文化になれていない場合、困惑もあるかも知れない。しかし、これは一種のアウトリーチ活動でもあり、実際に研究活動が活発に行われていることが部局内部でも共有可能となった。加えて、私は春から急ぎで実験室や学生の居住スペースの再生を行っている。カオティックな空間は不活発な研究活動の言い訳になったとしても、その環境からクリエイティブな仕事や人材を産み出すことが極めて難しいからだ。今後、CNEAS内だけでなく、国内外からたくさんの方の訪問者を迎え入れたい。

3. 何ができるか?何が必要か?

国際誌の査読や国際学会でのセッションの起案など、広義の国際研究交流のやり方は個人ベースでもたくさんある。私は年間20編以上の査読をこなし(Publons.com参照)、何編かは編集にも携わっている。相当なエネルギーを必要とするが国際学術コミュニティへの貢献だと信じて行っている。環境づくりに関して言うと、研究論文の要旨を廊下に掲示するだけでも、研究空間が演出され、それをきっかけに新しい学際領域的研究が生まれるかもしれない。海外へ出かけることがなくても、ビデオ通話で海外の共同研究者とアイコンタクトのものの議論はいくらでも可能だ。幸い最近になってCNEASにもビデオ会議システムが設置され、多地点間ビデオ会議を積極的に行える準備ができた。我々の国際交流は学術交流なので、相手側との間に相補的なメリットがない限り成立せず、公式な国際学術交流が開始されると、目に見えた実績が求められる(人材育成など、実績が見えるまでに時間がかかる場合もある)。民間団体の異文化交流とは異なり「おもてなし」のセンスは必要ない。むしろ、強い意識と緊張感を持続していかないと、実績があがらない原因を、研究推進とは全く関係の無い異文化に求めてしまう。結局のところ、国際的な学術交流の現場で重要なのは洗練された雰囲気とひとりひとりの意識であって、緊張感にあふれた日常の研究生活のなかにどれだけ研究とは直接関係のない話題が提供されているかに尽きるのではないかと。つまり、人の相互作用を促進させるクリエイティブな空間が鍵なのであろう。

———おわりに、CNEASのたいていの方はお気づきかもしれないが、川北合同研究棟の西側入り口に、ハーブや花を植えている(写真2)。アメリカの大学や研究機関では徹底してキャンパスの美観が保持されている。研究者と学生をクリエイティブな状態にもっていきやすい環境づくりの一環でもあるが、身の回りの植物や小動物は日常の話題作りには最も適している。実際、ガーデニングは研究・教育に例えることがたやすい。多少時間がかかっても季節が来れば勢いよく葉が茂り、花が咲く。水やりを忘れると枯れることがあり、肥料の与えすぎは逆効果、ときには害虫被害にも悩まされる。最近、CNEASの教職員の一部だけでなく、川北合同研究棟5階の高度教養教育・学生支援機構所属の外国人の語学の先生達がとても楽しんで下さっているのを知った。クリエイティブな環境をめざした道半ばの小さな象徴として、多くの方に楽しんでもらいたい。



写真1. カーネギー研究所地球物理学ラボのダグラス・ランブル先生の居室(廊下から撮影)(2016年3月22日)



写真2. 川北合同研究棟の西側入り口の小さなハーブ園(2016年4月29日)